

「日本の ODA を考える会」

－新時代の国際協力－

1. シンガポールの「リー・クアンユー公共政策大学院」院長のキショール・マブバニ氏の著書「New Asian Hemisphere」（新しいアジア半球）という一冊の本から話を始める。

彼は国連常駐代表であったが、それよりも国際政治学者として知られている。欧米のリーダーに向けて、ダボス会議等で挑戦的な論陣をはっている。

2. 私が注目したのは、この本の日本語出版で解説を書いた JICA の緒方理事長の着目点である。

第 1 点：日本はアジア半球に含まれない。つまり、日本は弱体化する西欧クラブの一員と見なされていること。

第 2 点：世界人口の 12% を占める G7 の国々が、残る 88% の政治経済動向を決定し、それが“正統”であると認識されてきたという事実を“西欧世界支配の神話”として葬る。

第 3 点：日本はアジアのリーダー、アジアと世界との架け橋になれない。架け橋になるには、西欧とアジア双方の世界にどっぷりつかってきた経験が必要。

第 4 点：日本はアジアを見ずにやり過ぎしてきたところを、アジアを直視し、支援するのではなく、相手からも倣うという姿勢が求められる。

3. 横断的分析からの提言～新しい発見

私は JICA から依頼されて、昨年 11 月～12 月にかけて、ASEAN 3 カ国、3 つの 30～40 年以上の歳月を費やしたプロジェクトを、温故知新という切り口で訪ね、取材して、現在に通用する新しい解釈を探った。

私たちは、「日本の知見、人脈」を発見する旅と称した。3 つのプロジェクトは①今年 8 月で 50 周年を迎えるタイのモンクット王工科大学、②マレーシアの SIRIM という工業標準研究所、③シンガポールの生産性向上プロジェクト。

さて、結論からいって、30～40 年たっても日本の知見、人脈は健在だった。かつてのわが国 ODA の財産（アセット）は今も立派に育っていた。

## (1) 「連携型国際協力」のすすめ

- ・ASEAN 中進国あるいは準中進国と共に考え、共に行動する日本の「連携型国際協力」を提案。これは、かつての南北問題から生まれた先進国が途上国を一方的に援助するというコンセプトではなく、深い信頼関係に根ざし、時間をかけて形成され、蓄積された ASEAN 諸国の ODA 「財産」(アセット) を、成長しつつある ASEAN 各国と連携意識をもって、他の途上国を援助するという新しい援助コンセプトを提示するもの。

地球環境問題に向けても、「連携型国際協力」は世界的なモデルになり得る。

- ・事実関係。①モンクット王工科大学は日本と一緒にラオス国立大学工学部教授陣のレベルアップに協力。また、早くから第三国研修を担当。②シンガポールの生産性協会は、同国外務省の依頼で、英連邦協力の一環としてボツワナで研修を行っている。③マレーシアは日本と共に工業標準化を広くアジア、アフリカへ移転したいと考えている。
- ・ASEAN との「連携型国際協力」のもう一つの側面。
  - ①日本と ASEAN との連携は地勢学的にも、政治・経済的にも“共生”という点で重要な意味をもつ。日本と ASEAN との相互補完関係は、少子高齢化に向かう日本にとって、避けられない命題である。②中印が大きく成長するなかで、日本と ASEAN との連携協力は、ASEAN の存在感を高めることにも役立ち、アジア地域のバランスを保つという意味でも重要な視点である。

## (2) 「ネットワーク型国際協力」

### ①ASEAN の政策立案協力

日本と共通の ASEAN との政策研究を行う。「人脈形成」に役立つ。

たとえば、新しい産業政策あるいは民営化政策、環境政策、少子高齢化による社会保障政策など。

### ②「知的開発協力」のすすめ (知的ネットワークの形成)

- ・ASEAN 工学系高等教育ネットワーク (AUN/SEED-Net) と官民連携による「共同研究基金」。

## (3) 長期プロジェクト実施のすすめと ASEAN 既存国際協力プロジェクトの見直し

- ・5 年ルールの矛盾

結論：「無から有」を生む協力から「有から更なる有」を生む協力へ。